高知県立坂本龍馬記念館だより　2017（平成29）年7月　第102号

高知県立坂本龍馬記念館　The Sakamoto Ryoma Memorial Museum

飛竜乗雲（ひりゅうじょうう）

海援隊旗（二曳きの旗）

http://www.ryoma-kinenkan.jp

飛竜 HIRYU JOUN 乗雲

県外巡回展リポート（上）

各地で好評。次は広島展へ

本年1月から開催している県外巡回展「土佐から来たぜよ！坂本龍馬展」は、6月末に岡山、熊本、東京と三会場の公開を終え、最終会場である広島展（ふくやま草戸千軒ミュージアム広島県立歴史博物館）の準備に入りました。（7月14日～9月10日）

開館以来初めての県外巡回展ですが、各地各会場の特色も加わり、150年前に没した幕末の志士・坂本龍馬の魅力を多くの方にご覧いただいております。2回にわたり、その一端をご紹介いたします。

熱い視線を感じた日々

岡山・林原美術館（1月20日～3月12日）

林原美術館は烏城（うじょう）と呼ばれる岡山城お堀端にあって、岡山藩主池田家ゆかりの資料や東洋古美術を多く所蔵されています。国宝、重文の刀剣や能装束など、愛好家には垂涎の美術館です。

緑茂る中庭をめぐる回廊のような美術館に、龍馬の手紙をはじめとする当館資料が一斉に並んだ様子は、なじんでいるはずの資料群がまったく違うものに見えるほど圧巻でした。中でも、昭和初期に坂本龍馬家に贈られた12代酒井田柿右衛門作・龍馬立像の後ろに岡山藩の錦旗が2枚並んだ様子は、明治という時代を知らない尊王の志士・龍馬その後を彷彿とさせるようで、その迫力に感じ入りました。また、龍馬像についての数少ない所蔵者の情報もあり、これからの調査研究に弾みがつきました。

錦旗と龍馬像（林原美術館）

解説を聞く人たち（林原美術館）

2回開催した会場での展示解説は、入場制限も出るほどの盛況で、岡山をはじめ周辺各県各地の龍馬への関心の高さを肌で感じることが出来ました。

小楠先生とともに

熊本・熊本県立美術館（4月8日～5月14日）

熊本県立美術館は熊本城の中にある美術館。熊本地震によって被災した熊本城を望みながら、反って肥後人の誇りと強靭さを知ることになりました。また、奇しくも岡山・林原美術館と同じ建築家・前川国男氏による建物ということで、城という文化財の中にあって風景に違和感なく堂々とした会場でした。

「土佐の龍馬、肥後の小楠」と題し、龍馬とゆかりの深い横井小楠（1809～69、熊本藩士で儒学者・福井藩の政治顧問）とともに龍馬をご紹介いただきました。龍馬が熊本にある小楠先生の家塾「四時軒」を訪ねたこと、〝船中八策〟へ大きな影響を与えた「国是七条」を教示されたことなど有名な話です。今回、小楠の新出資料なども初公開され、没後150年を経て、二人が会合したような意義深い展示に、熊本県内外からたくさんの方が来られました。

ゆったり龍馬と対話する人たち（熊本県立美術館）

熊本県立美術館に設置された大きな看板

当館が休館した後、熊本展から始めた『拝啓龍馬殿』には「龍馬から地震に負けない、復興への勇気をもらった」というようなメッセージが寄せられ、龍馬記念館にとっても大きなエールとなりました（本紙7ページに紹介）。

末筆ながら、学芸員はじめ主催団体及び関係の皆様の熱意とご努力に、心より感謝御礼を申しあげます。

前田　由紀枝

学芸員の視点

企画展ができるまで

亀尾美香

学芸員の仕事は展示だけではないが、最もわかりやすい仕事はやはり展示だろう。普段おこなっている資料収集や保管、調査研究などの成果を目に見えるかたちで表現したのが展示であるといってよい。ひとつの展示会がオープンを迎えるまでには、膨大な時間と手間をかけた綿密な下準備（展示資料の収集・選定・調査、内容構成、借用手続き、パネル・ポスター類・図録等の作成、資料運搬と展示作業等々）が必要となる。今回は、現在進行中の展示準備作業の一端をご紹介したい。

来春、龍馬記念館は新館・既存館そろってグランドオープンを迎えるが、オープンの年には四つの企画展を開催予定である。筆者が担当するのは二つめの夏の企画展「土佐と会津」展（仮）で、戊辰戦争では敵対した会津と土佐との関わりを、幕末から民権期まで通観しようという試みである。

展示の組み立て方法は学芸員それぞれだろうが、筆者はまず手当たり次第に文献をそろえるところから始める。基本的な人物の履歴や図表などを貼り込んでノートを作る。何となく章立てを考え、資料や必要なデータをリストアップする。何となく展示室の図面を描き、資料を（サイズも考えて）配置してみる。資料リストを見ながら調達方法を考え（予算が許せば購入できるものは購入する、パネルで済むものは済ますなど）、借用が必要と思われる資料については、所蔵先に連絡をとって調査の段取りをする。実際の資料の状態や大きさなどを確認し、借用の可否や条件、展示期間などについて先方に相談をする。これらを、順序立ててではなく混然と並行しながらおこなう。

会津若松市内にある西軍墓地。会津戦争で没した土佐藩兵 49 名の墓がある。

来年の「土佐と会津」展では、やはり福島の資料が必要になるため、先日会津若松市と三春町へ出張した。初めての福島であったが土地の空気を感じ、史跡をめぐり、各所蔵機関へお邪魔し調査をさせていただいた。写真は数多く撮影し、碑や像など一部は実際に展示で用いることとなる。ただ実際のところ、一度の出張ではカバーしきれない部分もあり、おそらく再度の訪問が必要となろう。

今回の展示準備には、これまでにない未知の要素が数多くある。新しい展示室ができるため、部屋の広さやケースの大きさは数字上把握できるものの、イメージが全くつかめない。また、部屋もケースも大幅に広がるため、従来よりはるかに多い点数の資料を準備する必要がある。これには、先方に提示された展示期間に制限があり、期間中の展示替えが想定されるという事情もある。さらに、これまで館蔵資料や県内からの借用資料でまかなっていた展示資料を、遠方から数多く借用することになる点。運搬には「美専車」と呼ばれる美術品運搬専用のトラックに専門のスタッフが付き、学芸員が同乗して陸路で輸送することになる。加えて、これまで企画展では作成しなかった小冊子（展示会の規模により図録になる場合も）を作成予定であることなど。やるべき仕事は山のようにある。

福島県三春町に立つ河野広中像（写真右）。衆議院議長も務めた河野は三春出身で民権運動から身を起こした。旧三春藩は戊辰戦争において断金隊の尽力で無血開城するなど、土佐との関わりが深い。

展示開催まであと1年。新館の開館準備と並行して、企画展開催までまだまだ遠い道のりである。

「浦戸 歴史の風景」(5)

汽船スイリン（朱林）

土佐史談会会長
現代龍馬学会理事
宅間 一之

蒸気船スイリンは土佐藩の手に渡って「夕顔」と名前を変えた。箒木に空蟬、胡蝶、夕顔、羽衣に横笛、若紫に乙女そして紅葉賀、それは財政難に苦しみつつ土佐藩が時勢の要求として購入した船舶であり、『源氏物語』にちなむ温雅な船名である。なかでも「夕顔」は龍馬たちの「船中八策」の舞台ともなる藩第一級の汽船として歴史にその名を刻している。

坂本龍馬記念館に展示されている「夕顔」の模型と、夕顔の船室は筆者には特別の思いがある。模型は学芸専門員として展示を担当した20年ほど前、手紙の複製とパネル展示しかなかった中で、唯一の立体参考展示物を目指して制作した苦渋の時期の思いが満載される。船室は大河ドラマ『龍馬伝』に関わる歴史民俗資料館での企画展の産物である。スイリン誕生のイギリスの造船所に設計図を求め、NHKの船室セットに触手を伸ばし、お台場「船の科学館」での資料収集に汗した時間がしっかりと詰まるものである。

慶応3年1月、荷主はイギリス商人オールト、取扱人には後藤象二郎、由比畦三郎、高橋勝右衛門らの名が見える。代価も洋銀15万5千枚と廉価ではない。アーネスト・サトウは、イカルス号水夫殺人事件の談判後、長崎まで二日間スイリン号に乗った。「粗食、きたない船室、ひどい暑さ、無愛想な乗組員」「精も根も尽き果てた苦痛の極致」「あきらめをもって我慢」する。速力は遅く「幸いにも天候は穏やかだったが、さもなければ、どう考えても沈没したと思われるようなボロ船」と『一外交官の見た明治維新』に書き残す。文面に「夕顔」の姿が去来する。

だが短期間にこれだけの汽船を購入し、洋式船舶によって装備された海上交通の近代化が、土佐の商業や経済に有形無形の影響を与えたことは大であり、日本の近代化への遺産として、これら船舶の果たした役割と貢献度は大きい。

「夕顔」はいま物部の里に疎開し、船体を休め、新装館での展示の日を待っていると聞いた。

「夕顔」の想像模型（記念館で）

東吉野村エッセイ⑩

村に残る『天誅組ゆかりの槍』

奈良県・東吉野村 教育委員会
峠 隆司

昨年、東吉野村鷲家在住の中尾氏から、村に対し、文久3年、旅宿「日浦屋」（紀州藩本陣）の長押に掛けられていた天誅組ゆかりの槍一本を御寄贈いただいた。

「日浦屋」の子孫にあたる中尾さんは、子どもの頃、旅宿「日浦屋」で遊んだことがあり、長押に槍が掛かっていたのを覚えている。

この槍は、『兼房』と銘があり、槍頭の刃紋などから文化的価値があることが分かる。また、紀州藩の記録や『天誅組紀行』（吉見良三著）にも、紀州藩士と藤本鉄石・福浦元吉二人の激しい戦闘のようすとともに、鉄石が使った槍として紹介されている。

11月に、天誅組顕彰事業、東吉野村催事の中で、天誅組総裁藤本鉄石、生誕200年を記念し、講演をはじめ、藤本鉄石の掛け軸とともに、この天誅組ゆかりの槍を展示することができた。

天誅組ゆかりの槍

鷲家　旅宿「日浦屋」

藤本鉄石・福浦元吉の最期

天誅組挙兵の時、総裁職として重要な位置をしめ、常に主将中山忠光と行動をともにした鉄石は、吉野の険しい山々に難渋しながら、9月24日、川上村武木の大西家などで昼食のもてなしを受け、足の郷峠を越えて東吉野に入ってきた。

その後、鉄石は両眼失明の松本奎堂に同行、鷲家口を迂回して伊豆尾、萩原を超えて岩本谷を下る。

25日夕刻、常に藤本鉄石の近くに仕えて行動し、最前線を各地に転戦して勇名をはせた福浦元吉とともに、伊勢街道の鷲家街道の野見谷口にあらわれた鉄石は、探索中の紀州藩銃手、的場喜一郎を一撃のもとに倒し、紀州藩脇本陣日浦屋（中尾宅横）に突入、乱刃のもとに鉄石・元吉ともども壮絶な最期をとげた。

詳しくは、紀州藩の記録に次のように出ている。

『前略・・・一揆主従両人（藤本・福浦）稲妻の如く駆け廻り、打留兼候内、両人共旅宿へ駈込み、津之助（鉄石）は旅宿に所持の長押に掛けたる槍を手早く取り、主従必死に相働き、・・・中略・・・両人叉復奥庭へ駆廻る。下人の真向うを、梶川三十郎、槍にて林楠之丞見掛け突掛り候処、・・・後略』

※「いはゆる天誅組の大和義挙の研究」（久保田辰彦　昭和6年発行より）

天誅組総裁 藤本鉄石 遺詠

雲をふみ 岩をさくみし
もののふの
よろひの袖に 紅葉かつちる

『桂浜・浦戸　碑めぐり』❺

中世の山城には珍しい天守台『浦戸城』碑

現在、当館と国民宿舎桂浜荘が建っている地は、土佐の戦国武将本山氏により浦戸城が築かれた場所である。標高59m土佐湾に面した中世の山城である。天正19年土佐の戦国武将長宗我部元親は岡豊城から海上交通の便がいい浦戸城へと移っている。

浦戸城は、中世の山城としては珍しい天守台があり、天守台へと登っていく階段の横に「浦戸城碑」（平成7年2月7日建立 高知市教育委員会）がずっしりとかまえている。

一般的に天守は台の上に立っているものであり、浦戸城のような台状の地形や石垣で台形に築き上げられた地形は「天守台」と呼ばれる。そして、その台形地形の上面に天守の礎石か、柱の跡等あれば、それが「天守」となる。

浦戸城には中世の山城には見られない天守台があるが、一般的には高知城のような近世の城に見られるものである。このように浦戸城には各所に中世の城を凌駕するところが見られ、またそれらは、浦戸城が中世の城から近世の城郭に変わっていく過渡期の重要な城であることを物語るものである。

江戸時代に入ると、山内一豊が土佐藩主となり慶長6年に入城するが、2年後の慶長8年に浦戸城の天守や石材などを大高坂城（現・高知城）に移され浦戸城は廃城となった。

浦戸城や岡豊城（国史跡）、どちらの特徴をみても、長宗我部元親という人物は、城づくりにおいて先進的な考え方をもっていたと考えられる。

四国山脈に囲まれ、閉塞感のある土佐にお

いてどうやってそのような考え方を持つことができたのか、ますます長宗我部元親という人物を興味深く感じる。

現在は、うっそうとした木々に囲まれ天守台には小さな祠がある。本山氏・長宗我部氏・山内氏はそれぞれに希望・野心をいだきながら太平洋を望んでいたのかもしれないと思った。

平成30年春にグランドオープンする当館では、常設展示として浦戸城を紹介する予定である。ぜひ浦戸城跡と合わせてご見学いただきたい。

中平　文・濱田　愛華

『桂浜・浦戸　碑めぐり』❻

「桃葉先生之碑」最後の言葉は「なんちゃじゃなかった…」

桂浜公園の龍馬像から西に少し歩いた開けた場所。　土日はアイスクリンを販売している丁度前あたりに少し前のめりに傾いたユニークな石碑がある。その石に刻まれている文字は「桃葉先生之碑」（題字・村松梢風　昭和18年建立）。作家田中貢太郎（桃葉）の碑である。桃葉という筆名は桃の花が美しい季節に生まれたことからきているとか。名前に桃と入るだけで何とも愛らしく、ご本人のお写真を見ると、着物を着流した童顔の丸いお顔に親しみやすいお人柄が窺える。

田中貢太郎は明治13年（1880）高知市仁井田に生まれた。三里尋常小学校を卒業後、叔父の家で船大工を手伝う傍ら本を読み漢学を学んだ。母校の代用教員を務めたあと、明治35年（1902）に「高知実業新聞」に入社したが翌年退職、上京。大正初め『田岡嶺雲・幸徳秋水・奥宮健之追懐録』、その後『旋風時代』の発表を機に大衆作家としての地位を確立するまでになった。昭和9年（1934）

には文壇の大御所菊池寛に抗し「博浪沙」を主宰、井伏鱒二・尾崎士郎・田岡典夫・浜本浩など多くの作家を育てることになる。

郷党の大先輩、大町桂月との師弟関係は有名で、「貢太郎の恩師桂月に対する終生変わらぬ至純の情は美談であった」と言われる。大正7年と、9年には桂月と土佐へ帰り、各地を巡った。昭和4年（1929）桂浜の桂月碑の除幕式で、酒をこよなく愛した桂月を偲んで碑に上り酒を注いだのが、酒供養の会の起こりである。貢太郎自身も「ちくと一杯」が口癖で、書斎でくつろぐ横には酒の樽。碑文には「酒ヲ愛スルコト命ノ如…」と刻記されているほどの酒仙家。桂月と共にどれほどのお酒を酌み交わしたことだろうか。

最後の言葉は「なんちゃじゃなかったきにのう」。この世も人の命も儚い…。桂浜の月を師弟で愛で、お酒を飲み、今もそんな話をしているのかもしれない。新緑が眩しい桂浜公園。松林の中、碑の建つ場所でそんなことを思った。

宮崎　圭子・尾崎　由紀

飛騰の紙面にスマホをかざして動画を見よう！　**視聴方法は簡単！**

① 右のQRコードから無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード
② アプリを起動し ▶ マークのついた写真にスマホをかざす

※端末の環境により、イメージが認識されるまでに時間がかかる場合や、正常に動作しない場合があります。
※本コンテンツは2017年9月30日まで閲覧可能です。

グランドオープンに期待する①

「桂浜に新たな魅力づくりを！」

国民宿舎「桂浜荘」（一般財団法人高知市桂浜公園開発公社）
理事長　山下　司さん

建築工事が順調に進み、新館の形も見えてきました。こうした中、記念館と連携して様々な取り組みを行ってきた皆様からは、グランドオープンに向けた期待の声が寄せられています。

第1回は記念館に隣接し、よさこい踊りのチームの立ち上げなどで協働してきた国民宿舎「桂浜荘」（一般財団法人高知市桂浜公園開発公社）の理事長山下司さんの声をお届けします。

〝今の桂浜の魅力は？〟と聞かれたら、やっぱりそれは龍馬記念館なんですよ。司馬さんが龍馬像は桂浜やないといかんと言ってるでしょう。ここがよく似合う。龍馬ファンにとったらここは聖地でしょう。龍馬が育った土地や風土という物語のベースがあって、それに龍馬の考え方や生き様を見て、聞いて、学んで、楽しんでいくのが記念館だと私は思う。そこがリニューアルオープンしたら、今までより機能・用途・広さ・資料などがグレードアップされる。そこに私たちは魅力を感じ、期待するわけですよ。

もちろん課題はあると思う。今まで以上に、専門の学芸員さんやそれぞれの立場の職員さんが、各々の役割を果たし、2倍のものを3倍にも4倍にもして内容を充実させ発信していって欲しい。そのためには企画や展示の中身だけに終わるのではなく、どのように記念館を運営していくのかに懸かっていくと思う。

物事をリクエストがあってやってみるのか、元々自分たちでやって魅力を感じてもらうのかでは決定的な違いがあると思う。そこがうまくいっている場所には、また行ってみたいと思う。そういう記念館になって欲しい。そうすれば、桂浜を訪れる人も増えるし、高知も賑わうと思います。

要するにハードではなく人、つまり魂。魂を入れる。すばらしい器に職員が一体となり、それが何倍にもなるようにやって欲しい。それが大きな実になることを期待しています。（談）

中村　昌代

桂浜をバックに語る山下理事長

ここは館長の部屋

髙松　清之

銀のスプーンと龍馬記念館

先日、ある新聞記事の中で「銀のスプーンを銜えて生まれてきた子はすくすく育ち・・・」というフレーズが目に入った。

その記事は、競馬のビッグレースで勝利した牝の若駒について述べたもので、彼女（？）の父母はいずれも競走馬として素晴らしい戦績を残しており、血統が大きく人（馬）生を左右する競走馬の世界では、飛び抜けて優れた血を引く馬であることに言及したものであった。

「銀のスプーンを・・・」の意味するところを調べてみると、西欧諸国では生まれてきた赤ちゃんが洗礼を受ける時に、その子が一生食べ物に困ることの無いようにとの思いを込めて、スプーンをプレゼントする習わしがあったようである。そして、贈られるスプーンの材質は、それぞれの家庭の経済状況に応じて木製から様々な金属製までがあったようで、高価な銀製のスプーンを贈ることができるということは、裕福な家に生まれてきたことを表しており、その子には、お金に困ることなく、幸せな将来が約束されているということ（人生の幸不幸が経済的なことだけで決まるものではないという事は当然のことではあるが）を象徴しているとのことであった。

「競馬」の話から始まり、記念館の話題に続いて行くことに頭を傾げる方もおられるとは思うが、「龍馬」の馬つながりということでお許しいただきたい。

さて、記念館新館の建築工事は順調に進捗し、既に2階部分のコンクリート工事が行われており、新館の大きさが実感できる状況となってきた。また、展示関係の準備についても、次第に具体的な検討が進んでいる。こうした動きを受けて、間もなく来春のグランドオープンの日取が話題に上ってくることになりそうである。

記念館は、幕末維新の英傑の中でも飛び抜けてファンが多い「龍馬」の存在や桂浜という県内有数の観光地にあるという恵まれた環境のもとに生まれたこともあり、多くの皆様の手ですくすくと育てていただいてきた。ある意味では、銀のスプーンを銜えて生まれてきたとも言えるのではという思いが、冒頭に紹介した記事を目にして頭をよぎったところである。

ともあれ、こうした恵まれた環境に甘えることなく、記念館をさらに大きく育てていくことに労を惜しんではならないとの気概は、記念館職員一人ひとりのものとしていかなければならないと思う。

東側（桂浜荘側）から見た改装工事中の記念館

拝啓 龍馬殿

平成29年3月21日～6月20日

70通

「お遍路始めました」

一年ぶりに龍馬さんに会いに来ました。今回は高校のときから大の仲良しの2人をつれてきました。実は秋からお遍路を始めました。公共交通機関を使っての巡礼です。お経はいいですね。となえていると身体がきれいになっていく気がします。覚えて、見なくても言えるようになったらいいなぁと思っています。娘は秋にお寺で結婚式をし、無事に仲良く暮らしています。それも龍馬さんや乙女さんのおかげです。外に出させてやる勇気をいただきました。そんな娘が4月から小学校で図工の先生になります。どうかどうかやりとげられるよう見守ってください。また報告に来ます。

追伸 今年も6年生が卒業していきました。わたしにとって最後の卒業生です。みなすばらしい子ばかりでした。

（3月25日　東京　C・E　59歳　女性）

「初心」

世の中をよくするという志を立て、実現に向けて動き回っておられたことに深く感動致しました。新聞、テレビでよくないことを見ない日はない今の世の中で、龍馬先生のような綺麗で、潔く、真っ直ぐな心を持てる人は、どれほどいるでしょうか。一人でも自分と相手を尊重しつつ周囲に良い影響を与えられる人間を育てていきたいと思います。初心を再確認致しました。ありがとうございました。

（3月25日　福岡　Y・T　23歳　男性）

「心優しい警察官に」

志の高さや行動力、人をひきつける力、どれをとっても「すごいなぁ」の一言です。あと10日もすれば、私は社会人となります。そんな人生の節目にここに来られたことを感謝しています。世のため、人のために尽くせるような心優しい警察官になってきます！警察学校、頑張るぜよ。

追伸『龍馬伝』を観てハマッたミーハーでしたが、ここに来てますます好きになりました。150年という年月を経ても人の心を掴めるってすごいですね。

（3月25日　福岡　M・F　22歳　女性）

「ぜよ」

最高！高知の空気で体を満たしたぜよ。

（3月26日　群馬　K・S　32歳　男性）

「先生」

龍馬先生初めまして。大阪から参りました。坂本龍馬記念館に来るまでは先生のことを“日本を変えたすごい人”というイメージでしか存じておりませんでしたが、記念館にあるたくさんの展示物や先生のお手紙、先生にまつわる映像の数々を拝見し、どれほど素晴らしい人物だったかを学ぶことが出来ました。歴史にもあまり興味がなかった私ですが、今日のことをキッカケにもっと先生のこと、日本の歴史を知りたいと強く感じました。来月京都にも行くので先生ゆかりの地へも絶対に足を運びます。私は4月から社会人になります。先生のように強くたくましく、意思をしっかりともった人物へと成長していきます。ありがとうございました。

（3月26日　大阪　R・N　22歳　女性）

「心の師」

私と龍馬殿の出会いは25年前『お～い！竜馬』という一冊の漫画がきっかけでした。幼いころは泣き虫で寝小便たれだった龍馬殿が、成長し、藩を飛び越え、日本を、世界を相手に大活躍される物語に、中学生時分、胸を躍らせて夢中になりました。すっかり龍馬殿のファンになり早25年。こうしてあなたが生まれ育ち、希望にあふれていた桂浜や生誕の地に来れて本当に嬉しく思っています。これからもいつまでもずっと自分の中でヒーローであります。龍馬殿に、最後に、私の心の中ではあなたは今も生き続けています。心の師であります。本当にありがとうございます。

（3月26日　千葉　H・A　38歳　男性）

「龍馬にアタック」

龍馬さん。私は大河ドラマの『龍馬伝』を小学生のときに見て激ハマリして、それ以来、龍馬関連の本を読みあさり、あなたの一生についていろいろ知りました。龍馬さんの考え方は革新的で、もし現代に生まれていたとしてもきっと革命家として名を上げていたんじゃないかなぁ～。私がもし龍馬さんと同じ時代にいたら迷わずアタックして龍馬さんのおよめさんになります。

（3月26日　香川　H・K　18歳　女性）

「龍馬に感謝」

やっと貴方に会えました。よくぞ、日本の国を洗濯してくださった。その御礼を申し上げたかったのです。これからもしっかり見守ってください。

（3月28日　兵庫　U・I　87歳）

「りょうまです」

ぼくはあなたという人がいてくれて、とてもかんしゃしました。りゆうは、ぼくの名前が、あなたからもらった名前だからです。あなたのような人になれるようにがんばります。

（3月29日　愛知　R・N　8歳　男子）

「志」

「日本を今一度せんたくいたし申し候」。今の日本にも言えることでしょう。そのような志を持った人が増えていくことを願います。今日は大雨でしたが、龍馬さんの手紙からありがたい言葉を頂き、来た甲斐がありました。

（3月31日　和歌山　N・H　33歳　男性）

「歴史を学ぶ」

歴史上で一番大好きなりょうまへ

歴史を学ぶことは、一度と同じあやまちを繰り返さないこと、と高校の教師に教えてもらい、日本史が大好きになった。新しい国をつくろうと、戦いのない国をつくろうとしたりょうま。りょうま達がいるから今の日本がある。りょうま達の意思を受けついで、戦いのない世界がきますように。

（3月31日　和歌山　M・H　34歳　女性）

「最後の日に」

今日はこの記念館がリニューアルする前の最後の日なので記念に来てみました。この手紙を書くのも初めてですが、あいにくの雨の日にようさん人がきております。私には龍馬さんのような大きな夢は無いですが、この歳になっても、まだ声優になりたいと思うバカ者です。夢ばかりはなんぼ言うてもタダですき、今日も元気に進みます。この記念館ともしばらくお別れですが、またお会いしましょう。

（3月31日　高知　A・Y　38歳　男性）

「先祖は禁門の変で闘った」

龍馬様、幕末にはいろいろご活躍頂きまして長州藩もお世話になりました。先祖は、長州では吉田先生の近くに住み、禁門の変等で闘ったようですが、最後は北陸で会津軍と闘い果てましたが、龍馬様のお蔭で日本が夜明けを迎えることができたと感謝して居ります。龍馬記念館改築中で残念ですが、完成後は又お目にかかれるのを楽しみにして居ります。

（5月24日　無記名）

「工事中で残念」

霊場巡りで貴殿の記念館の展示物をすみずみまで見せてもらおうと期待していましたが、工事中で残念でした。貴殿が志半ばであの世にいったのは誠に残念な限りで、もし天寿をまっとうしていたなら、東アジアの平和のみならず、世界平和にも大きく貢献されていたことでしょう。その道程では、人種問題らにも強く抗議され、白人から目をつけられたことでしょう。貴殿の行いや考え方はこの世に残されて、それを認識された偉大な人々がその後の日本を発展させてきたのでしょう。

（5月31日　愛媛　Y・H　62歳　男性）

＊＊＊編集者より＊＊＊

記念館が休館に入る前のわずかな期間に素敵なメッセージがたくさん寄せられました。新たな門出の季節。皆さんの前向きなメッセージに、グランドオープンに向けて前進あるのみの当館職員一同もパワーをいただきました。

休館中は、記念館の仮事務所のある桂浜荘地下1 階のほか、県外巡回展の会場にも拝啓龍馬殿コーナーを設置していただき、引き続きメッセージをお寄せいただいています。

今回は熊本会場でお寄せいただいたメッセージをご紹介しました。なかなか高知に来られない方々にも龍馬の資料をご覧いただき、龍馬の熱い思いや、幕末の空気を感じていただけたことと思います。熊本の皆さん！次は高知で待ちゆうきね。

尾﨑　由紀

2017年県外巡回展 会場の声

熊本 (4/8～5/14) 「負けんばい！」

「尊敬しています」

「土佐の龍馬・肥後の小楠」展を楽しみにしてきました。龍馬さんが好きで、全国ゆかりのある龍馬さんの所に行き、今回熊本であり、ゆっくり見させて頂き、龍馬さんの相手に対する思いやり、優しさ、しかし自分には厳しいところ、同性としても尊敬するばかりです。この展覧会を見て、去年おきた熊本地震で復興に向け一歩一歩の日々ですが、龍馬さんのような考えと生き方を少しでもして行き歩むので、龍馬さん見ててくださいね。

（4月8日　熊本市　S・S　男性）

「息子に思う」

本日、息子の涼雅と一緒にお伺い致しました。大変楽しくお手紙も拝見しましたが、いつも思います。小学校5年生の時に本を読み思いました。現在15才の息子を育てており、なかなか言うことを真剣に聞いてくれません。何が言いたいかといいますと、せっかく心配してくれている方がいたのに11／15もっともっと真剣に受け止めていてくれたらと思います。同じ様に、今、息子に思う次第です。

（4月8日　熊本市　C・M　41歳　女性）

「がんばるぜよ」

これからもがんばるぜよ。くよくよしてちゃいかんぜよ。がんばろう熊本。龍馬さんありがとう！！

（4月9日　熊本市　H・T　42歳　男性）

「オープンを楽しみに」

私は司馬先生の『竜馬がゆく』を読んで以来、約40年間、坂本龍馬を敬愛してまいりました。私心を捨て、これからの日本のために活動される姿に、自分もそういう生き方をしていきたいと思いました。2018年の坂本龍馬記念館オープンには是非行きたいと思います。この企画をしてくださった全ての方に心より感謝申し上げます。

（4月9日　熊本市　Y・O　59歳　男性）

「まけません」

りょうまさん、にっぽんをすくってくれてありがとうございます。くまもとじしんにまけません。

（4月16日　熊本市　S・N　6歳　男子）

「できることから」

以前から高知の坂本龍馬記念館を訪れたいと思っていましたが、なかなか行くことができず、今回、熊本県立美術館で「土佐の龍馬・肥後の小楠」展を見て、あなたとつながりのある横井小楠を通して、あなたを身近に感じることができて良かったです。数多く残されているあなたの手紙はおどるような字で、自由に書きたいことを書いていますね。日本は今、現代の〝万国公法〟とも言える、日本国憲法（＝平和憲法）を踏みつけ、捨て去ろうとしています。そんなとき、あなたから勇気をもらいました。自由にものが言えない時代になってからでは遅いのです。私もできることからしっかり発言していこうと思いました。本当にありがとう！

（4月22日　熊本県八代市　M・U　58歳　女性）

「龍馬に会えた！」

新緑の目映い午後、貴殿にふれることが叶い、まず感謝を申し上げます。これまで長崎や鹿児島へ出向き、貴殿が現れるかと楽しみにしておりましたが、そうは簡単にはいきませんでした。今でも尚大勢の龍馬ファンがいるから、私なんてその中の一人ですし、何よりも楢崎お龍さんを始め、たくさんの家族・仲間がいらっしゃいますからね。しかし、今日は意表を突かれましたわ！今日初めて観た「血染掛軸」の前に立った時、私は涙が溢れて、当時その現場の様子、情景が朗かに見えてきたんです。とても衝激の無残な思いから、流血により体温が下がっていった厳しさ、またその中に慎太郎、藤吉、想い浮かが面々、そして最後に未来を案じ憂いていった最期まで…。その真に強い真意を以て今も生きていると。貴殿のお心に痛く共感しました。そして「今、私たちが日本人として生きているのもあなたのおかげです。ありがとうございます」と言うと、龍馬さんから「ありがとう（わかってくれて）」とまた返ってきたので、天にも登る気持ちになりました。もったいのうございます。元岡藩中川公に仕え、清正公とともに文禄・慶長の役に出兵したご先祖様を持つ大分県豊後大野市出身者です。

（4月23日　熊本県菊陽町　E・M　44歳　女性）

「死してなお」

岩倉、西郷や大久保に煙たがられていた龍馬の開明性が命取りになったが、それはそれ。死後にこれだけ日本人の心底に何かを残した青年は龍馬一人ではなかろうか。人はいずれ死ぬ。現在これだけの若者はこの国には居ない。残念。

（4月27日　熊本市　S・H　85歳　男性）

「次は高知で」

手紙でもうかがえる龍馬さんのあたたかい人格が大好きです。色褪せない魅力をこれからも伝え続けてください。今度は高知へ会いに行きますね！

（4月29日　熊本県上天草市　A・N　25歳　女性）

「龍馬の心」

坂本龍馬の生き方・考え方を知り、影響を受け、我が子も大きな心をもってほしいと思い、「龍馬の心」と書いて、龍之心と名前を付けさせていただきました。

（4月30日　熊本市　R・H　0歳　男子　代筆：母）

「父」

父が死んで4年。父の名は龍馬。何度か名前の由来について聞かされた事があり、龍馬記念館に行きたい事も話していました。思いは子供に伝わらなかったが、ここにいると思います。

（5月3日　熊本市　S・Y　62歳　男性）

「推理」

息子は龍馬が大好きです。今回、龍馬の刀を見れてとてもうれしかったです。息子は一つ疑問があり、一体誰に龍馬は暗殺されたかです。色々と息子なりに推理をしています。今でも皆のあこがれの的の龍馬はとてもかっこいいです。

（5月4日　鹿児島市　S・K　8歳　男子　代筆：母）

「ひとこと」

かっこいいです。

（5月4日　熊本市　R・U　9歳　男子）

「着てみたい」

今日、龍馬さんのてんじを見に来ました。龍馬さんが持っていた刀も見ました。とてもかっこよかったです。龍馬さんの服がとてもかっこよくて、その服が着てみたいくらいかっこいいです。どこにくらしていたんですか？生きてたら会いたいし、いろいろ聞いてみたいです。またてんじを見に行きます。

（5月6日　和歌山県　Y・O　9歳　女子）

「ありがとう」

土佐の龍馬、素晴らしい展示会でした。ありがとうございました。

（5月7日　熊本市　K・S　55歳　男性）

「龍馬のおみやげ」

龍馬さんが熊本、もとい肥後に様々な「おみやげ」を残したことは150年以上たった今でも我々県民の大きな励みになっています。熊本はまだまだ大変な状況が続いていますが、龍馬さんの気持ちにならって前へ進もうと思います。

（5月14日　宇城市　S・M　42歳　男性）

「めざすぜよ」

龍馬殿のもんぷくや脇差はかっこよかったです。ぼくは龍馬さんが大好きです。暗殺される前の手紙や家族への最後の手紙感動しました。龍馬さんのこころざしを見習い、ぼくもりっぱな大人になりたいです。ぼくは坂本龍馬をめざすぜよ。いろんなことにちょうせんします。いつかあえますように。ぼくのあこがれのそんざいです。

（5月14日　熊本市　E・T　10歳　男子）

「伸び伸びと」

若い頃はあなたが亡くなった32才が近づくたびに何かをやりとげねば、何かを残さねばと焦っていたように思います。あなたが残した手紙を見て、自由で動きのある文字から私も少し自由に伸び伸びと生きていきたいなと思いました。国のためにとか大きなことはできなくても、自分の好きなことや大事に思っていることを少しずつでも楽しんでやっていきたいと思います。不思議ですね。あなたに会ったことはありませんが、あなたの姿はとてもリアルに感じ勇気づけられました。

（5月14日　熊本市　T・T　41歳　男性）

「力の源」

佐賀から来ました。今の平成29年は幕末に似ている所があり、参考にしていく所があります。ぼくも龍馬さんのように足をつかって、学ぶ所がたくさんあり今日来ました。来てよかったです。今後の人生において、とてもきちょうな熊本訪問となり、佐賀でも自分としても〝力〟の源となりました。ありがとう。加藤さんも大好きです！土木の神様。薩長土肥150年！熊本城が再び直るまで佐賀より応援しています。

（5月14日　佐賀市　N・K　39歳　男性）

「人の一生」

もっと長く生きられたら日本の国家の為、百姓町人の為、生きてほしかったものです。今、日本はいい時代であるが人間性は下落の時代。自分さえ良ければそれでいい。中には立派な人もいますが、それは百人に一人。楽をしようという人もあれば人のために一生けんめいがんばる人もいます。がんばればきっとよくなる、それが人生の良き生きる道。人の一生は重き荷を負い遠き道を行が如し。

（熊本県菊池市　H・F　68歳　男性）

「7歳の龍馬ファン」

こんど、こうちにあそびにいきます。日本のためにはたらいてくれてありがとう。おかげで日本があたらしくなりました。りょうたもがんばります。ありがとうございます。

（熊本県合志市　R・I　7歳　男子）

■ 記念館・長寿番組「海の見える窓から」～好評放送中です！

こんにちは。FM高知パーソナリティーの伊藤実沙子です。

FM高知朝のワイド番組「Hi-Six Shake Shake Shake」（毎週月～金曜日8:20～10:55）月・火・水曜日のパーソナリティーを担当しています。そのワイド番組内で坂本龍馬記念館のオリジナルコーナー「海の見える窓から」（毎週月曜日8:42～8：47）がスタートしたのは2010年4月。リスナーの皆様にも好評のコーナーとなっており、早いもので今年は8年目に突入しました。毎週、学芸員はじめ職員の皆さんに龍馬や歴史に関する様々なお話を伺っています。歴史に疎い私に説明するのは苦労なさっているのでは？と思います。

私は皆さんのお話を聞いていると、龍馬やその周辺の時代背景が頭の中に広がり、歴史の面白さを実感するとともに 空想タイムトリップを楽しんでおります。

また、龍馬ゆかりの地である安田町取材にでかけたり、県外の歴史文化関連施設の方々にもお話を伺ったりと、貴重な体験の数々を楽しんでいます。

これからも龍馬が残した功績を伝え、龍馬の残したものが現代を生きる人々のヒントになるような放送を続けていければと考えております。これからもリスナーの皆さんと坂本龍馬記念館をつなぐ番組をお送りしていきます。ぜひ聴いてくださいね。

FM高知　伊藤　実沙子

職員紹介
「新しい記念館に向けて」

この4月より、坂本龍馬記念館に配属されました河村です。6年ぶりに、博物館の現場に舞い戻ってまいりました。当館は、来年春に重要文化財などの貴重な資料展示も可能な新館がオープン、そして、既存館もリニューアルオープンいたします。約25年前の県立美術館開館に次いで、再び「開館」に関わる、という貴重な体験をさせていただけそうで、嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。学芸専門員 河村 章代

紙芝居を持って、「出前講座」始まる！

4月からの休館期間を活用して、紙芝居を中心にした「出前講座」を始めました。

その第1回目を、6月12日に高知市立一ツ橋小学校の4年生で行いました。今回の講座は、龍馬の少年時代を描いた「紙芝居」と学芸員による龍馬のお話という内容です。

少年時代の龍馬が、自分をいじめる子にも優しく接し、また、“乙女姉やん”に剣術を鍛えられるエピソードを紹介するストーリーの紙芝居に、子どもたちは聞き入っていました。紙芝居の後は、学芸員が龍馬の業績などをわかりやすく説明。「龍馬が日本で初めての新婚旅行に行ったというのは本当?」などの質問が出たり、「大政奉還」について詳しく説明してくれたり、龍馬や幕末に関心を持つ子どもが多いことを改めて感じました。

この「出前講座」はこれからも、県内各地の幼稚園や小学校で開催をしていきますので、ご希望の方は記念館までお問合せください。

河村 章代

第１回目の講座＝高知市一ツ橋小学校で

第5回 夏休み子ども・龍馬フォーラム「龍馬暗殺150年！“歴史新聞”にチャレンジ！」

今年は坂本龍馬が暗殺されて150年になります。みなさんが、この「大事件」を新聞記事にするなら、どう紹介しますか？事前に集めた情報や学芸員に聞いたお話をもとに、みんなと話し合ったことをまとめて、「新聞」を作り、発表していきます。（協力：高知新聞社NIE推進部）

★平成29年度高知県教職員互助会助成事業

日時　平成29年8月15日(火)
10:00～15:00(予定)

会場　国民宿舎「桂浜荘」

対象・定員
小学校4年生～中学3年生
20名(参加無料)

★詳細は記念館にお問合せください。

入　館　状　況

2017年３月31日まで（開館以来9,225日）

◆総入館者数		3,936,760人
◆最多入館	(2010年５月２日)	6,686人
◆最少入館	(2004年10月20日、台風のため)	8人
◆2016年度最多入館	(2016年５月４日)	2,098人
◆2016年度最少入館	(2016年12月21日)	36人

編　集　後　記

『飛騰』を校正している頃、桂浜荘周辺には色とりどりの紫陽花が梅雨空を映していました。しかし、梅雨の合間のジリジリするような陽射しは、これからの暑い夏を予感させます。

県外巡回展、工事は順調に進んでいます。建設と並行して新館と既存館の展示図面もどんどん具体的になっており、来春のグランドオープンが現実味を帯びてきました。職員も桂浜荘にある事務所にすっかりなじみ、休館とはいえ多忙な毎日です。

そんな中、記念館に期待する声が聞こえてきました。今号からご紹介するコーナーの１番バッターは、記念館と最も近い「桂浜荘」・山下司理事長の声です。記念館への大きなエールだと感じています。

まもなく夏本番。記念館は動いています。ぜひ、『飛騰』へのご意見ご感想などお寄せください。（ゆ）

館だより“飛　騰”第102号（年４回発行）表紙題字：書家 沢田 明子氏
発行日　2017(平成29)年７月１日
発　行　公益財団法人高知県文化財団
高知県立坂本龍馬記念館
〒781-0262 高知市浦戸城山830-25「桂浜荘」内
TEL (088)841-0001　FAX (088)841-0015
http://www.ryoma-kinenkan.jp
「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

来春、2018年 グランドオープン！

館だより「飛騰」は、郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は、120円切手をご希望回数（４回分まで）お送りください

私のテーマ

いろは丸事件の記録（2）

渋谷　雅之

いろは丸航海日記

前回解説した「坂本龍馬關係文書 第二」が刊行されてから2年後、豊川渉存命中の昭和3年6月「いろは丸航海日記」と表題され〝伊豫史談會〟と印刷された原稿用紙に毛筆書きされた資料が伊予史談会により作成された。現在この資料は伊予史談会から愛媛県立図書館に寄託されている（左写真）。その電子複写物が伊予市立図書館に所蔵されているが、こちらには加筆や書き込みがあり、複製資料とは呼べないものである。

資料の前半は「坂本龍馬關係文書 第二」の内容と基本的に同じである。前半の末尾に「右坂本龍馬関係文書第二ヨリ抜抄」と引用を明記しているが、この資料がもともと伊予史談会から提供された資料だとすれば、やや不自然である。あるいは、岩崎英重が用いた資料は大洲史談会から直接提供されたものであり、「坂本龍馬關係文書 第二」の刊行後、伊予史談会が資料の保存を引き継いだという推測も可能である。

これらの記録に続いて「慶応三年四月廿三日ヨリ（備後鞆津ニ於テ以呂波丸沈没ニ関シ紀藩士ト応接筆記）」（便宜上これを「記録Ⓐ」とする）という記録、および事件関係書状等が収載されている。これらは「坂本龍馬關係文書 第二」に収録されなかった伊予史談会所蔵資料と思われる。記録の最後に「右坂本龍馬関係文書ヨリ抜抄」と書かれているが、この「坂本龍馬関係文書」は「坂本龍馬關係文書 第二」のことではなく、伊予史談会所蔵の「坂本龍馬関係文書」を意味すると思われる。

ここに記録されている「記録Ⓐ」は「坂本龍馬關係文書 第二」（および「いろは丸航海日記」）に記録されている紀州・土佐の応接記録のうち、長崎に移動するまで鞆の浦で行われた交渉の経過をまとめた記録（「記録Ⓑ」とする）と、内容的にほぼ同じである。ただし、「記録Ⓐ」の書きぶりは「記録Ⓑ」のものと異なり、別人によるものであることは一読してわかる。

この「記録Ⓐ」とほぼ同じ記録（「記録Ⓒ」とする）が山内家史料（幕末維新第六編 第十六代豊範公紀）に「備後鞆津ニ於テ才谷梅太郎紀州高柳楠之助等ト應接筆記」というタイトルで収載され「良子所蔵文書」とされている。この資料の所在や素性に関する解説は、例によってまったくないが、土佐山内家宝物資料館（現・高知県立高知城歴史博物館）に同じタイトルの資料が所蔵されており、出所は同じと思われる。記録Ⓐと Ⓒは新旧漢字の違いや誤解読と思われる軽微な違いの他は同一と言っていい。記録Ⓒには「筆者ハ蓋シ長岡謙吉ナルベシ」と注釈されている。この注釈の筆記責任も不明だが、おそらく平尾道雄氏による注釈ではなかろうか。

これらの記録を読み比べ、記録ⒶとⒸは長岡謙吉が筆記した記録の別人による写しであり、記録Ⓑは、これがわかりやすく書き直されたものという印象を持った。記録Ⓐの最後には茂田一次郎や五代才助の書状なども収録されており、いずれも「坂本龍馬關係文書 第二」に引用されなかった伊予史談会の補助資料のように思われる。筆者には記録Ⓐ（Ⓒ）が江戸期の筆遣い、記録Ⓑは明治期の筆遣いのように感ぜられた。

結論として、記録Ⓐ（Ⓒ）は事件当時豊川渉が回覧記録を謄写したものであり、記録Ⓑは豊川渉が明治期にわかりやすく書き直したもののように感ぜられる。総じて前述の〝別人〟は豊川渉自身を意味する。

なお、「坂本龍馬手記 イロハ丸航海日誌」と表題された毛筆書き資料の複写物が現存し、その内容が「坂本龍馬全集（宮地佐一郎編）」に活字化されている他、写真記録も残されている。この資料は新潟県の遠藤家が所蔵するものだが、内容は細部を除き基本的に記録Ⓑと同じであり、豊川渉による書き直し資料の写しと思われる。

年を経て、いろは丸に関連した資料は昭和55年、伊予市教育委員会（堀井恭弍編）により「いろは丸航海日記」として刊行された。この書物をまとめた堀井恭弍は、冒頭に「幸い私のノートの中に『豊川渉日記』の抜抄があり云々」と記述し、その資料（**④いろは丸終始顛末**）を冒頭に配置しているが、これ以下は「坂本龍馬關係文書 第二」の②③（前回記事参照）の順に編集されている。昭和三年の伊予史談会による「いろは丸航海日記」と同様に〝右坂本龍馬関係文書第二ヨリ抜抄〟と書かれているにもかかわらず「坂本龍馬關係文書 第二」冒頭の「**①明光艦海路線図**」は引用されていない。このことは、この海路線図が伊予史談会所蔵資料ではなかったことを暗示している。

その後昭和5年に逝去するまで10年あまりの期間に、豊川渉は日記を元にして生涯の記録「思出之記」を書き綴った。次回はそのことについて述べる。

第9回龍馬学会総会・研究発表会

テーマ「大政奉還150年・龍馬没後150年」

第9回「高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会」は5月27日に高知市文化プラザ「かるぽーと」を会場にして開催した。来賓の高知県副知事・岩城孝章氏、高知市教育委員会教育次長の高岡幸史氏が開催中の「志国高知幕末維新博」等に触れながら祝辞を寄せた。

研究発表では、土佐史談会前副会長の谷是氏による「龍馬と越前藩」、高知龍馬の会理事の井倉俊一郎氏による「開成館から大政奉還へ」、徳島大学名誉教授の渋谷雅之氏による「いろは丸航海日記」、坂本龍馬記念館主任学芸員の三浦夏樹氏による「坂本龍馬の新国家構想について」とそれぞれの研究テーマに基づく興味ある報告がなされた。また、特別講演は高知県立高知城歴史博物館学芸課長の藤田雅子氏による「大政奉還150年」。本大会のメインテーマである「大政奉還150年・龍馬没後150年」に迫る歴史の転換点に関する講演であった。

発表会に先立ち、現代龍馬学会の総会が開かれ、事業計画や予算を承認の後、新会長に高知大学非常勤講師の宮英司氏、宮氏後任の副会長に竹内土佐郎氏、事務局長に坂本龍馬記念館館長の高松清之氏らを選出し、片岡雅文会長は顧問となられた。本会設立の趣旨等を確認して閉会した。

来賓

高知県副知事 岩城 孝章 氏

高知市教育委員会 教育次長 高岡 幸史 氏

宣言

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は、平成二十一年四月の発足から九年目を迎え、県内外から七十一人が参加して第九回研究発表会を開いた。テーマは「大政奉還一五〇年・龍馬没後一五〇年」。社会のさまざまな場面で閉塞感が漂う中、龍馬とその時代に学び、人と人とのつながりの大切さを考えようとしたものだ。

特別講演は高知城歴史博物館学芸課長の藤田雅子さん。他に、県内外の四人の研究家が日頃の研鑽に基づいた発表を行い、私たちは多くのことを学んだ。

龍馬が逝って一五〇年。県下では「志国高知幕末維新博」が開かれている。一方、日本を取り巻く諸外国との関係は緊張感が最大限に高まっている。このような時こそ、私たちは龍馬らの生きた激動と変革の時代に学び、何をなすべきかを考えつつ、誤りのない道を確実に歩んでいきたいと思う。

平成二十九年五月二十七日

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

特別講演

「大政奉還150年」
土佐藩建白書は将軍に大英断をもって王政復古を促す名文

高知県立高知城歴史博物館 学芸課長 **藤田 雅子** 氏

「私が勤めている高知城歴史博物館は3月にオープンし、私は土佐藩の歴史、大名、藩正史を担当しています」という自己紹介から始まり、大政奉還についての説明、『大政奉還建白書』の読み解きなど、テーマに沿った意義深い内容でした。

藤田さんによる建白書の現代語訳は、「おそれながら（将軍徳川慶喜へ）建言申し上げます。憂国の士は皆口をとざし、あえて幕府へ意見する者がいない昨今の状況は誠に憂慮すべきです。朝廷・幕府、公家・大名の考えは一致しておらず、国内は分裂しています。これは誠に恐るべき事態です」と始まり、「（私が恐れるのは）この状況は我が国にとって憂慮すべき事態であるばかりか、彼ら（諸外国）にとっては大変好都合であるということです。国内分裂からの内戦、これこそが彼らの術中といえましょう」と続きます。建白書は将軍に大英断をもって王政復古を促す名文で、襟を正しながら訳した様子なども語られました。

最後に大政奉還の意義として「提案の中の文面では王政復古という言葉で精一杯だったようですが、文章を丹念に読めば読むほど、戻るところを目指しているわけではなく、先に進む、生まれ変わる、自分たちが次の新しい世界に進むんだ、そういった理念を提案していることが読み取れたと思います。大政奉還は『戻す』と言いながら実は戻っていない、前に進むための提案だった」ということでまとめ、会場からは大きな拍手が起こりました。

詳しい内容は、本年度「紀要」で改めてご紹介します。

新会長として

宮 英司 会長

教員OBである私は、現代龍馬学会として、高知の子どもたちがおとなになって県外に出たときに「さすがは高知の人だね」と言われるくらいの〝龍馬知識〟を持たせられるような活動もしていきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

熱心に聴き入る参加者たち＝かるぽーと

龍馬と越前藩

土佐史談会 前副会長
谷 是 氏

龍馬は脱藩後、越前の紹介を経て勝海舟に出会った。また、神戸の海軍操練所とともに勝塾を開くにあたっても、勝は龍馬を派遣し越前から五千両を借用している。龍馬は越前で村田巳三郎、三岡八郎（由利公正）、横井小楠にも出会い、小楠からは思想面で大きな影響を受けた。小楠の唱える「経世済民」の主張のもと、越前藩は藩札を庶民に貸し与え、成果物を海外に売り、利益を庶民に還元する富国策に取りかかっていた。龍馬は越前の成功例を目の当たりにし、これを日本全体で実現させようとした。

開成館から大政奉還へ ～土佐が日本国でトップランナーだったころ 九反田開成館時代～

高知龍馬の会 理事
井倉 俊一郎 氏

ジョン万次郎は海外の進んだ知識を日本にもたらし、後藤象二郎は海外からもたらされた世界地図を見て、日本と土佐の小ささを実感した。龍馬は脱藩して勝と出会い、一方で岩崎弥太郎は江戸へ留学している。のちに開成館にかかわる彼ら四人は「いちがいな土佐人」とは違う、柔軟な思考と進取の気性を持った人物であった。

慶応二年二月、九反田に開成館が完成する。土佐がトップランナーであった時代の象徴といえる開成館を背景に、四人の働きが加わり、大政奉還への流れがかたちづくられた。

いろは丸航海日記

徳島大学 名誉教授
渋谷 雅之 氏

いろは丸事件に関する資料は、大洲藩士・豊川渉が残したものが数種存在し、一部は岩崎鏡川編『坂本龍馬関係文書』に収録されている。しかし内容を検証すると岩崎の作話と思われる部分も存在する。いろは丸事件の賠償交渉記録には「世界ノ公論」という言葉が多用されているが、これには大政奉還建白が関係していると思われる。土佐藩の藩論であった大政奉還建白書は、慶応三年当時には民主的な色が濃く、後に民権運動に引き継がれてゆく。起草は寺村左膳によるものと考えられる。

坂本龍馬の新国家構想について

坂本龍馬記念館 主任学芸員
三浦 夏樹 氏

今年1月、「新国家」という言葉の書かれた龍馬の手紙が新たに発見され、話題となった。しかし、龍馬が描いていた新国家像を具体的に知ることは、資料が少ないため、かなり難しい。新国家を創設するには、政治体制は勿論、財政問題や国境問題、法律の整備、主権など様々な課題がある。これらについて、龍馬がどう認識をして、どう変えようとしていたのか、新政府綱領八策や新官制議定書、薩土盟約文、一部の手紙などを使い、日本の置かれた状況とも合わせて龍馬の新国家像を探ってみた。

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（三十）―

「田中伯爵邸の白い花」

宮川　禎一

京都国立博物館の西隣に広瀬さんという方がお住まいである。大変お元気な87歳だ。博物館に縁があってしばしば訪ねて来られる。今年の3月のある日、小さな六花弁の白い花を摘んで筆者のところへ持って来られた。聞けば田中光顕伯爵の家からもたらされた花なのだという。「子供の頃、蒲原の田中を名乗る女中さんから私の家に電話がかかってきて私が父親に取り次いだのだ」「それが土佐出身で宮内大臣を務めたことがある田中光顕伯爵のことだ。時々蜜柑も家に送られて来た」とのお話であった。筆者の目の前の人があの田中光顕と関係があったのかと感慨深かった。

広瀬さんの尊父は高名な銅鏡研究者の広瀬都巽氏である。この都巽氏と田中伯爵は古美術品のことで交流があり、蒲原（現静岡市清水区）にあった田中伯の邸宅青山荘を昭和十年頃に都巽氏が訪ねた際、その庭に咲いていた珍しい白い花を京都へ土産に持ち帰り家の前の道路との境目の植え込みに移植したのだという。数日後にそこを訪ねてみると確かに背の低い細い葉の中から写真のような六花弁の白い可憐な花が群れ咲いていた。明らかに人為的な移植の結果である。花の名前について広瀬さんは知らないということだったが、ネットで調べれば「ハナニラ」という早春に咲く南米原産の帰化植物であった。明治になって輸入され、現在では各地に伝播し、特に珍しくはないという。

田中光顕は天保14年、土佐の佐川に生まれ、幕末には田中顕助の名で中岡慎太郎や坂本龍馬の元で志士活動を行った。昭和14年まで生きて土佐出身の志士らの顕彰活動をおこなった。龍馬の手紙の調査に行けば田中光顕の跋文をみることがしばしばである。

4月になって静岡市蒲原で現在青山荘を管理されている会社の方に電話でお願いして確認していただいたところ「青山荘の裏にも沢山咲いていますよ」とのお返事と花の写真をいただいたのも面白いところである。

この白い花は静岡から京都に移されて80年を経ても毎年春に咲いてきたのだ。路傍の花にも歴史があるという話である。

ハナニラの花

コラム・龍馬のこと

「以蔵と龍馬」

宮　英司

岡田以蔵（1838～1865）。土佐勤王党員。名は宜振。変名、土井鉄三。天保九年生まれ。父は香美郡神通寺村（現香美市）の郷士岡田義平で、弟・啓吉宜稔も勤王党員。剣を武市瑞山に学び、安政3(1856)年9月江戸に出て、桃井春蔵に入門し、4年9月帰国。その後、中国地方、九州地方を武術歴遊。文久元（1861）年4月に武市瑞山との約束に従って江戸に出、8月の勤王党結成時には加盟していたと伝えられているが、のちに名簿から削られている。

「人斬り以蔵」として名を挙げたのは土佐の井上佐市郎や越後の本間精一郎らを次々と暗殺したことによる。しかし、一方では勝海舟の護衛を務め、伏見において勝の危機を救ったりもしている。最後は勤王党への弾圧の下、土佐藩に捉えられ、仲間とともに拷問ののち慶応元年閏5月11日、打ち首となり、以蔵だけが梟首とされた。

幕末の志士の多くが写真を残しているが、以蔵と断定できる写真はない。また、墓は高知市薊野北町1丁目の東真宗寺山。高知市の北部環状線沿い。有名な沢田マンションの北側にある。孟宗竹の林の中に父や弟らとともに眠っている。「岡田宜振」と刻まれた墓碑があり、ファンの手によって驚くほど美しく保たれている。

脱線が過ぎるかも知れないが、ドラマ史上のベスト1の以蔵役は萩原健一（大河ドラマ「勝海舟」1974年）だったと思う。佐藤健の以蔵（大河ドラマ「龍馬伝」2010年）も良かったが、もう少し年齢がほしかった･･･と思う。

龍馬と以蔵。両者はどんな人間関係を編んでいたのだろうか。以蔵が半平太に従わず、龍馬と行動をともにしていたら全く違う人生だったかも知れない。また、近江屋に以蔵が同席していたら、歴史が変わっていたかも知れない･･･などと考えたりもする。どことなく暗いイメージで描かれる以蔵だが、墓地を訪ねるファンは今も多い。

“話してみるかよ”

「四半世紀」

江上　英治

龍馬記念館がオープンして早25年になる。記念館創設にあたっては龍馬像同様に青年会議所のメンバーを中心とした当時の龍馬を慕う若いエネルギーがあった。

30年位前の柳町通り、夜な夜なメンバーが集まるバーがあった。『もっと募金が集まるいい知恵はないもんかの～！』そこでは、そんな話題に終始していた。当時、テレホンカードに始まり、Tシャツや没になったトレーナーまで幅広く収益事業を行ったものだった。携帯電話の無い時代！連絡手段は主にポケベルだったのでテレホンカードはよく売れた。Tシャツに至っては県内で苦戦するものの、県外から来る営業社員が私の着ている龍馬Tシャツを見て、『どこで売っているんですか！』『私が売っているんだよ』こんな調子で1週間後には10着位の注文がまとまり、トータルで60着位はさばいたかと思う。「竜馬がゆく」に強く影響を受けた司馬遼太郎世代も、はや還暦を過ぎてしまった。アナログ世代と言われる人たちは、今自分のやりたかった事に没頭している方々が多い。ようやく好きな歴史研究の時間が取れるようになったものの『やればやるほど時間が無い』と嘆く先生方もおいでになる。便利なパソコンを使えば知りたいことが即座に検索できる時代ではあるが、足で稼いだ情報に勝るものはない。時代の変化と共に失われていくもの、壊されていくもの、いろいろあるが、博物館として格上げされる新しい記念館には、次世代を見据えた運営戦略が必要であるし、龍馬らしさ！を生かす、民意同調の施策が望まれる。

龍馬生誕150年記念
テレホンカード

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山830-25「桂浜荘」内
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp